

6. 大切な友達へ

各務原市立蘇原第一小学校

6年 飯田 千花 遠藤 百華 中谷 綾華
横山 祐花 廣瀬 七萌 伊藤 緋奈乃



敦賀市立中央小学校

6年 松本 遥香 加藤 詩音

セミの声が大きく響く。今日はとても暑くて、最高気温の記録を更新しそうだ。

「アイス買いに行く？」

食いしんぼうな夢川果林が言った。

「うん。暑いしね。いいよ」

親友の原野梓が答えた。二人は五年生。幼なじみでいつもいっしょである。

二人は、同じ種類のアイスを買って、仲良く食べながら、梓の家へ向かった。

「わあ。かわいい。これどうしたの？」

果林が叫んだ理由。それは、梓のベッドの上にくまのぬいぐるみを見つけたから。

「えへへ。誕生日におばあちゃんからもらったの」

「貸して！」

「いやだ。絶対にだめ」

しかし、果林は、言い出したら聞かない。二人は、ぬいぐるみの取り合いになってしまった。

“ビリッ。ビリ”

ついに、ぬいぐるみの首の部分が破れた。梓は泣き出してしまった。それを見た果林は、

「ごめん」

と言い残し、梓の家を飛び出した。

(自分が悪いのに。大好きな梓の大切な物をこわしてしまって、ちゃんとあやまりもしないで……)

果林は、自己嫌悪に陥ってしまった。でも、何とかして梓にあやまらなければという気持ちだけは、どんどん大きくなっていく。

(そうだ。手紙を書いてあやまろう)

一晩悩んで書いた手紙は、

「梓、本当にごめん」

この一言だった。でも果林にとっては、生まれて初めて書く梓への手紙。

(許してくれるかな)

次の日、その手紙を梓のくつ箱に入れた。教室に入ると、梓の姿が見えた。手には、果林の手紙を持っているのが分かった。

(読んでくれたんだ)

果林は、そっと近づき話しかけた。友達との話に夢中で、梓には声が届かないようだ。いつもの自分なら、近づいてもう一度大きな声で話しかけるのだが、今日の果林は、それができない。こだわりすぎている自分が、自分でもよく理解できなかった。

すっきりしない気持ちのまま家にもどった果林は、テーブルの上にあった新聞の作文に目が向いた。

それは、『双子の私たち』という作文で、それまで何でも言い合えた双子の姉妹が、だんだん思ったことを素直に話さなくなり、距離ができてしまった経験や、二人がまた元のような関係にもどるまでの過程を書いたものだった。

あまりにも今の自分の気持ちにぴったりと合う内容なので、
(この人なら、今の私の気持ちを聞いてもらえるかも)

と、果林は話が聞いてみたくてたまらなくなった。小学校の名前がわかっていたので母に頼み、相手の女の子の名前や住所を調べることができた。

名前は、夢野舞。東京に住んでいる六年生。突然ではあったが、果林は、舞に手紙を書いた。

『あなたの書いた作文を読んで、ぜひあなたに気持ちを聞いてもらいたいと思い、手紙を書きました……』

これまでの梓との仲の良かった思い出や、この前のけんかから微妙な関係になってしまったことなどなど。

返事は、すぐに届いた。果林は、母から手紙を渡され、二階に上がって読み始めた。手紙には、こう書いてあった。

『ぬいぐるみのことで、気持ちがゆれているのは、梓ちゃんも同じだと思うよ。何となく素直になれないのは、果林ちゃん自身の無茶を言うところが、ずっと気になってイヤだったんじゃないかな。私だったら、その破れちゃったぬいぐるみを縫って直すかもしれないよ。どんなごめんなさいよりも心が伝わるんじゃないかな』

果林にとって、すばらしいアドバイスだった。あらためて、今まで梓に何かとわがままを言ったり、自分勝手に許してもらったりしていたことが思い出された。

(私、梓に甘えてばかりいたなあ。いつも梓が笑顔で許してくれてたから、それが当たり前になってしまっていた。あーあ。だめだな、私って)

自分で自分のことがよく見えてきた果林は、舞のアドバイス通りさっそく、ぬいぐるみを縫い直すことに決めた。

まずは、勇気を持って、そのことを伝えに梓の家に向かわなければ！

裁縫道具と、母に買ってもらったフェルトをバッグに入れて……。

今までうじうじと悩んでいたことがうそのように、鼻歌を歌いながら、スキップで梓の家に向かった。自分がちょっと成長したなと思える果林だった。★

いざ梓の家のドアの前に立つと、どうしても一歩が踏み出せなかった。ぐずぐずとその場に立っていると、ガチャリとドアが開き、梓の顔がのぞいた。

果林は、梓の顔を見たたん、なぜか怖くなって逃げ出した。

(ああ、私のばかばか！ アドバイスだってもらったのに)

果林は、自分で自分を責め、家に帰ると、二階にある自分の部屋に閉じこもってしまった。

しかし、いつまでもそこにいるわけにもいかない。お腹がグウグウと鳴ったので、おやつを食べるために果林は下の居間に向かった。

「お母さん。おや……」

そう言いかけたが、お母さんが電話で梓のお母さんと話をしているのが聞こえてきたので、果林は思わず息をひそめた。

「まあ、大変ねえ、急で」

お母さんの声が聞こえる。一体、何の話をしているのだろうと、果林はさらに耳をそばだてた。

「三年間もイタリアに転勤だなんて。しかも明日なんでしょう？」

果林は、その場でぼうぜんと立ちつくした。

(……えっ、梓が転校？)

果林は、裁縫道具をひつつかみ、裸足のまま家を飛び出した。

(梓にあやまらなきゃ)

梓の家に着いた。ハアハアと荒い息をついていると、びっくりしたような顔で梓が出てきた。

「明日転校しちゃうの？」

果林はいきなりそう聞いた。

「なんで教えてくれなかったの？」

「……ごめんね。果林が悲しむと思って」

果林は、それを黙って聞いていた。

(やっぱり私は梓に甘えていたんだな)

果林はそう思い、ずっと勇気がなくて言えなかった言葉を口にした。

「……私こそごめんね」

「……いいよ。私も悪かったんだし」

「私の方が悪いよ。あやまりもしないで」

「違うよ、私だよ」

「私だよ」

「私だってば」

「……クスッ」

玄関に立ったまま、私たちは笑った。心のおもりが取れていく気がした。

「入って」

梓が言った。

「うん」

「おじゃまします」

部屋に入ると、小さな段ボールが数個置いてあった。ふと涙が込み上げてきた。涙を隠すようにして、果林は言った。

「くまを直そう」

「うん」

二人は、夕ご飯を忘れ、ずっと直していた。裁縫も上手ではないが、出来上がった時の梓の顔は、とてもうれしそうだった。くまに結んだ赤いリボンのはしは、梓が果林の

手首に巻いてくれた。果林は、そのリボンを寝るときもずっと離さなかった。

次の日、梓を空港へ見送りに行った。梓は、あのくまのぬいぐるみを抱きかかえながら、飛行機に乗った。果林は、赤いリボンを巻かれた手を飛行機の飛ぶ青い空へ向けて大きく振った。

やっぱりさびしい。果林は涙ながらに家に帰った。

すると……。

「手紙が届いてるわよ」

果林に母が手紙を渡した。果林は、誰からだろうと思いながら、急いで二階に上がった。ビリビリッと破って、中身を読む。

それは、梓からの手紙だった。

『果林へ

くまのぬいぐるみが破れたとき、正直腹も立ちました。けれど、よく考えると、私も悪かったと思いました。

二人で直したくまの縫い目は、少しへたっぴだけど、私は、それを見るたびに、果林のことを思い出すよ。

三年後、また会える日まで、イタリアで私もがんばるから、果林もがんばってね☆

梓より』

ぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。私は、青い空を見上げて、もう一度手を振った。

大切な友達に。

さようなら梓。